

CHAPTER:2

「拳銃」

「どうして-----くれなかった？」

だれ^{だれ}の呼びかけで私^{わたし}は目^めを覚^さました。

ゆっくりと上^{じょうたい}体^おを起^おこす。

そこは『白^{しろ}い空^{くう}間^{かん}』としか形容^{けいよう}しようのない不思議^{ふしぎ}な空^{くう}間^{かん}だった。

窓^{まど}のない壁^{かべ}に閉塞^{へいそく}感^{かん}を生^{しょう}じさせる天^{てん}井^{じょう}。一つしかないドア。

そのどれもが奇妙^{きみょう}な非現実^{ひげんじつ}感^{かん}を帯^おびており、不気味^{ふきみ}な印象^{いんしょう}を与^{あた}えてくる。

困^{こん}わくしていた私^{わたし}は、見^み知^しった声^{こえ}に話^{はな}しかけられ、振^ふり返^{かえ}った。



「やあ。起^おきたかい？」



「お前^{まえ}は……」

こいつはシロ。私^{わたし}の親友^{しんゆう}のうちのひとりだ。

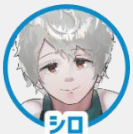
私^{わたし}の動揺^{どうよう}を知^しってか知^しらずか、彼^{かれ}は私^{わたし}に話^{はな}しかける。



「突然^{とつぜん}こんなところで目^め覚^ざめてビクリしたよね」



「ここは僕^{ぼく}の精^{せい}神^{しん}世^せ界^{かい}。今日^{きょう}は君^{くん}をこの場^ばに招^{しょう}待^{たい}させてもらった」



「今^{いま}から君^{くん}には、『あ^あの事^じ件^{けん}』の真^{しん}相^{そう}をもう一^{いち}度^ど、推^{すい}理^りしてもらう」

シロは喋^{しゃべ}りながら白^{しろ}い部^へ屋^やを歩^{ある}き、扉^{とびら}のノブに手^てを伸^のばした。

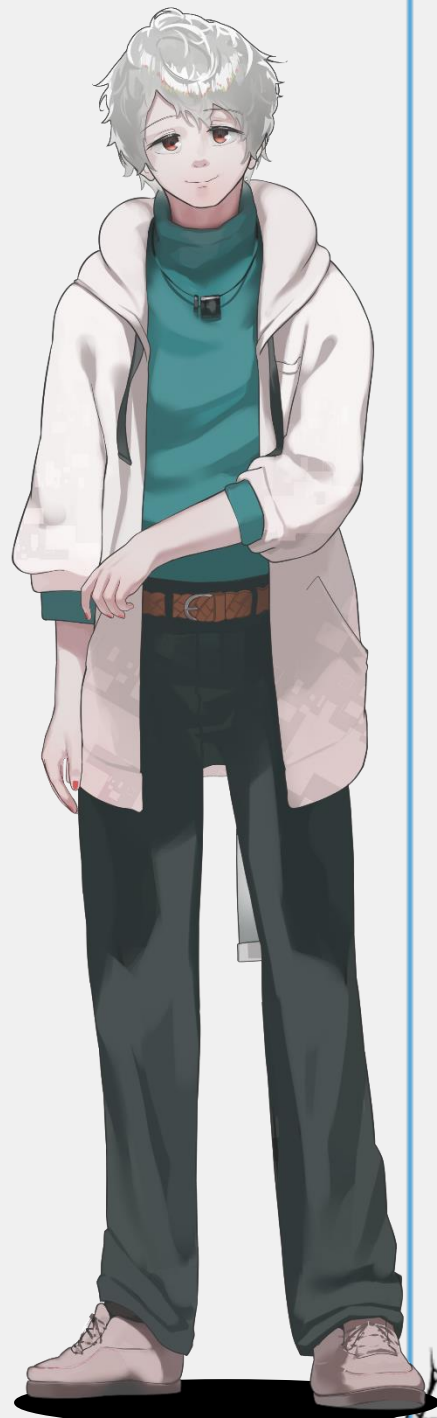
彼^{かれ}が手^てを引^ひいても、がたがたと音^{おと}がするばかりで扉^{とびら}は開^{ひら}かない。



「御^ご覧^{らん}の通^{とお}り、何^{なに}もしないでここから出^でることは出^で来^きない」



「君^{きみ}がここから出^でるための条^{じょう}件^{けん}は二^{ふた}つ」





「ひとつ、事件の真相を究明すること
ふたつ、引き金を何かに向けて引くこと」

そう言うとき、シロはいつの間にか手に持っていた拳銃をこちらに投げて渡した。
取りこぼさないように慌ててキャッチする。
拳銃にはノイズが走っており、現実感の薄れるような出来だったが、
何故かそれが本当に人を殺し足りえる凶器であることは本能的に理解できた。



「繰り返すけど、ここは精神世界だからね。
僕の記憶に詳しくないものは上手に再現できないんだ」

少し恥ずかしそうにシロは笑った。



「それじゃあ目を閉じて……、一緒に思い出そうじゃないか」

あたまが痛い。
脳が思い出すなと叫んでいる。



「あの日、『フード』は誰に殺されたのか？」

痛い。痛い。
思い出すな。思い出すな。



「……ごめんね。
でも、悔しいだろ？何も知らずに彼女の死を受け入れるなんて……」

シロは壁にもたれかかると、こちらをじっと見つめる。

ずしり。
手に持った拳銃が重くなった気がした。

